

# お薬のしおり

## 妊娠と薬

No.52 (H18.1)

東京医科大学病院 薬剤部

妊娠中の女性にとって、「薬を飲んでしまった」又「薬を飲んでも大丈夫か」という不安を持つ女性は案外多いものです。しかし、薬を飲んでいなくても先天異常(奇形)は100人に2人位の割合でみられるといわれており、この奇形の自然発生率を高めるような危険な薬はごく一部の特殊な薬だけです。とはいえ専門家は動物実験など出来る限りのデータを収集し、評価していますが、人での安全性を厳密に確かめることはなかなかできません。ですから、絶対大丈夫という保証はできないのです。

赤ちゃんへの影響は薬の服用時期に大きく左右されることがわかっており、一般に妊娠初期の影響が大きいと言われてしています。

### ○器官形成期以前

受精後18日目以前にダメージを受けた受精卵は、着床できず流産で消失してしまうか、うまく修復されて正常に出産されるかのどちらかです。これは「all or noneの法則」と呼ばれています。この時期は薬の影響はほとんどないと考えられます。

### ○器官形成期

妊娠2ヶ月～4ヶ月の頃には胎児の中枢神経、心臓、消化器、四肢などの重要な器官が形成されます。よって催奇形性に関しては最も敏感な時期であり、薬剤の投与には注意が必要です。サリドマイドによる胎児奇形が起こったのもこの時期です。

### ○機能成熟期

妊娠5ヶ月になると催奇形性の心配は少なくなりますが、胎児の機能的成熟に及ぼす影響や胎児環境悪化、発育の抑制などが起こる可能性があります。例えば降圧剤であるACE阻害薬、消炎鎮痛剤であるインドメタシンは、妊娠初期に服用しても奇形を起こすことはありませんが、胎盤を通過し、結果として羊水過



少を引き起こすため妊婦には禁忌となっています。

基本的には妊娠の可能性が否定されるまではむやみに薬を服用しないのが安全ですが、病気を治療中の方の中には、むしろ適切な薬をきちんと飲むことで子宮環境が良くなり、赤ちゃんの異常が減るというケースもあります。

ところで、みなさんが日常的に摂取するアルコールやタバコ、カフェインを含むコーヒー、サプリメントなどについても、薬物と同じように注意する必要があるので説明します。

**アルコール**：摂取したアルコール（エタノール）は容易に胎盤を通過して、胎児の体内に入ります。お酒をたくさん飲む妊婦から生まれた赤ちゃんに早産児・低体重児が多い傾向があり、また胎児性アルコール症候群もみられることがあります。妊婦に対するアルコール量の安全域は確立されていないので、妊娠中はお酒を控えるべきです。

**タバコ**：タバコには、ニコチンや一酸化炭素のほか多くの化学物質が含まれています。ニコチンは血管を収縮させる作用があるため、子宮へ流れる血液が減少し、胎児に運ばれる酸素や栄養分が減少します。また、一酸化炭素は酸素を運ぶヘモグロビンとの親和性が非常に高いため、酸素が十分に行きわたらず胎児が酸素不足の状態になります。近年、受動喫煙が健康上大きな問題となっていますが、妊婦のいる家庭や職場では特に注意が必要です。

**カフェイン**：コーヒーやお茶、栄養ドリンクにはカフェインが含まれ、過剰摂取することは望ましくありません。過剰摂取により、低体重児が生まれるという報告があります。しかし、コーヒーを1日1杯程度なら特に問題にはなりません。

**サプリメント**：ビタミンAは脂溶性ビタミンの一つで、動物や魚類の肝臓、乳脂肪、卵黄に多く含まれます。その働きとして、視覚作用、成長促進作用、皮膚や粘膜の保持作用などがあります。通常の食生活で過剰に摂取することはないのですが、サプリメントによる過剰摂取により胎児の催奇形性が知られています。

最後に、妊娠を予定している方は、妊娠前からバランスの良い食事を取るよう心がけ、健康に気をつけましょう。また、お薬が必要となった場合は医師に妊娠の可能性をきちんと伝え、少しでも危険性の少ない薬を処方してもらいましょう。

